

歌が生まれる

校歌制作レポート 第5回



イラスト：山崎奈緒

前回のおさらい

前回のレポートでは、公募に寄せられた言葉（赤&青文字）を使って作ったダミー歌詞（下記）をもとに色々と考えをめぐらせましたが、残念ながら青文字と①についての言及までで紙幅が尽きてしまいました。ただし、「学びの海」という言葉を見つけられたことが、収穫といえそうです。

- ① 木漏れ日揺れる裏山に 学海の風そよぐとき
- ② 赤き煉瓦の学舎（まなびや）に 集いし友と語る夢
- ③ 敬愛・勤勉・聡明を 若き歩みの旨として
- ④ 共に開かん知の扉 上田短大我が母校

今回は

- ②（校舎）：「赤煉瓦」は避けたい。校舎を歌わなくてもよい。
- ③（校是・校訓など）：悪くないが熟語は避けたい。説教臭いのは嫌。
- ④（校名）：なくてもよい。音名に置き換えて入れる…をやりたい。

について考えてみるつもりなのですが、さて、どこまで進めることができるでしょうか？

町田育弥 Profile

桐朋学園大学で作曲を専攻。中・高等学校教諭、音楽大学講師など常に教育に携わりつつ、作・編曲・演奏活動を展開。作品は、歌曲、室内楽、吹奏楽、管弦楽、劇音楽など多岐におよぶ。著書にピアノ教本「みみをすます」全4巻、歌曲集「あったかい」などがある。2014～2020年まで本学幼児教育学科教授を務めた。現在、本学客員教授、認定こども園恵泉幼稚園（さいたま市）園長。

♪♪♪ 8月13日 レポート

「赤煉瓦」はなぜダメか

私のよく知るある学校には、もう40年も前から瓦屋根のある建物は無くなっていますが、「我が学舎(まなびや)の薨(いらか)かな」という歌詞の校歌が今でも歌われています。建物というのは、長い目で見れば一時的な存在に過ぎず、ある時期の姿を具体的に描写すると後々そういう不整合が生じて、特定の期間にそこで学んだ人にしかリアリティのない歌詞になってしまう恐れがあります。北野講堂は素敵で印象的な建物ですが、だから「赤煉瓦」はやめたほうがいい。即物的に建物そのものを指すのではなく、象徴的な意味で「まなびや」という言葉を使う、というのはアリだと思いますが…。

熟語を解(ほど)くと「私」が現れる

「敬愛・勤勉・聡明」などの熟語は、意味内容が好ましいものであっても、そのまま歌詞に投入するだけでは、身体感覚とは乖離した単なる概念が額縁に嵌まって飾られているような状態になりがち。第3・4回レポートで私が言った ～「かくあれかし」的に上から垂れるような・説教臭い～ とはそういうことです。こういう熟語は、「敬う・愛する」「勤(いそ)しむ・勉(つと)める」「聡(さと)く・明るく」のように解(ほど)いてみると、身体感覚を持った主体としての「私」が意識されるようになります。「学海」を「学びの海」と解いたときに起こったのもこれと同じ。試しに、「敬う」「愛する」「学びの海」と声に出して言ってみる。するとその時、誰かを敬ったり、何かを愛したり、閃いたり溺れかけたりする主体としての「私」像が立ち現れるのではないのでしょうか？「敬愛」「学海」と声に出しても、そうはなりにくい。これは歌詞なので、歌った時にその人の心にどういうことが起こるか、それを考えて作るべきでしょう。

未来・飛翔・探求・叡智・大志・希望 etc…。切磋琢磨・山紫水明・一期一会・初志貫徹・勇猛精進 etc…。寄せられた言葉の中には、2字・4字ともたくさんの熟語がありましたが、それらを使う場合は、なるべく「解く」方針でいきたいと思います。

今回は再び青文字から

上記 ～熟語を解くと「私」が現れる～ は、実は前回のレポートの ～青文字の中に「私」がいる～ の話とつながります。歌詞の中にしっかり「私」の姿を描く、これは大事なことなのではないかな？ 歌うのは「私」なのだから。

今回はそのあたりから考えていこうと思います。